

第1章 結果の概要

1. 調査対象者の選定と概要

今回の調査では、農作業事故の情報が元々少ない中、事故に遭った人そのものを探し、選定する困難が付きまとった。いくつかの地域では、農業労災の事例から、事例を選定し、さらに本人の調査協力に対する了解を取った。また、地域の農協の協力、また農業機械士会の協力を得たり、また縁故を頼ったり、個人的に入手した情報を手がかりに事故情報を得て、本人の了解をとる作業に困難が終始つきまとった。

このように、公にされている一般の労災とは異なり、ほとんどが個人や家族の責任とされる農作業事故調査は、まさに、組織的な調査には到底および縁故・知人を頼るレベルで行わざるを得ない状況である。いずれにしても、いつの日か農作業事故が個人や家族責任ではなく、農作業事故の社会化、つまり農作業事故が社会的責任とされる日が来ることが、切に待ち望まれる。このことが、真に実態に基づいた有効な事故対策に結びつくと考えられる。

以上のように系統的な事故情報源がなかったもので、事例選定に当たっては、とくに事故の多いトラクターや草刈機などに限定せず、農作業事故であればどのような事故でも対象とすることとした。

2. 事故事例の概要

(1) 地域別事故事例数

各地域の農業形態を分類しがたいものもあったが、表1のとおり分類した。

収集された事例は153例であった。

この表が地域農業の実態ではないが、ある程度反映していると考えられる。

概観すると、水稻や畑作に関わる事故は全国くまなく発生している。果樹は、愛媛、長野などで、また酪農などは北海道、岩手などである。管理と分類したもの多くは、草刈りである。

除雪は降雪地帯にとって農道確保や施設の保守にとって重要な作業である。新潟から報告があるが、今回

表1. 地区別、農業形態別例数

NO	地区	水稻	畑作	果樹	酪農等	管理	山林	除雪	計
1	北海道	2	3		12				17
2	岩手県	1			3				4
3	福島県	1							1
4	栃木県	4			1				5
5	千葉県		1						1
6	長野県	9	7	6			1		23
7	新潟県	12	4			2		1	19
8	富山県	11	2	5	1	12			31
9	滋賀県	7	2			5	1		15
10	兵庫県	3		1		1			5
11	愛媛県	4	5	11		1			21
12	福岡県				1	1			2
13	佐賀県	4	3			2			9
	合計	58	27	23	18	24	2	1	153

の事例ではないが、最近汎用されている除雪機での指の切断、巻き込まれが多く発生している。

(2) 性別、年齢別事例数

性別、年齢別件数は表2のとおりである。北海道の1事例は、十勝の酪農公社での聞き取りで、そこに働く多くの方々の報告であり、1例1報告書となっていなかったため、この年代別の表からは外した。

表2. 男女別例数

年代	男	女	計
20～	4		4
25～	1		1
30～	1		1
35～	1		1
40～	5		5
45～	8	2	10
50～	16	4	20
55～	20	2	22
60～	25	1	26
65～	11	3	14
70～	20	4	24
75～	12	3	15
80～	7	2	9
合計	131	21	152

<最年少事例 19歳>

最も若い事例は、北海道の酪農青年である。

就業して2年目であり、ワンマンハーベスターの清掃中に牧草搬送チェーンに右足を羽交い締められ、断裂したものである。このハーベスターは1年前に導入したものであり、不慣れな要因もあったが、個別事例で述べるとおり、機械を開発したメーカーの設計ミスが大きく、有為の青年の大きな未来を奪った事例であった。

<最高年齢事例 84歳>

一方、最高齢は、長野県と滋賀県の84歳の事例である。長野県の事例は、耕耘機をトラックから歩み板を使ってバックで降ろす際、ギアがバックとなっていたと思っていたが実際はニュートラルになっており、そのために一気に下り、はね飛ばされたものである。また、滋賀県の事例は、トラクターで棚田地帯で一枚の田の耕起を終え、次にすぐ上の田を耕起のため小道を上る際（斜度11° 道幅1.0m）、ブレーキの連結ロックをせず、坂道をロータリーを上げたまま走行中、3m下に転落した事例である。本人は、通常このようなところを走行する場合、ブレーキの連結ロックを掛け、かつ作業機を降ろして走行しているとのことであった。

長野県の事例で、ギアが確実に入っているか確認作業の怠り、滋賀県の事例は、すぐ近くの田に移るとの意識で、いつもは行なっている安全手順の怠りである。このように思い込みや手順の手抜きは、若年者でも当然起こることである。しかし、高齢になるに従い、集中力の欠如や緊張感の継続が困難となる。とくに、高齢者では、一つひとつの作業に移る毎に、いつも行なっている作業であっても「これでいいか」、「これでいいか」の安全確認の繰り返しが必要である。もちろん、若者に作業を替わってもらうことや、環境を高齢者作業に優しいものに替える、高齢者仕様の機械の開発など抜本的対策は当然必要なことである。

(3) 農機機種別、用手具等別事故事例

平成12年の日本農村医学会の全国調査では、最も事故事例の多かったのは草刈機によるもので、収集された農機事故3,750件中、18.3%を占めていた。次いで、トラクター15.4%、軽トラ9.4%、コンバイン5.7%、耕耘機5.1%、チェーンソー5.1%の順であった。

今回収集した事例のうち農機事故は116件、うち草刈機事故が19件、16.4%、次いでトラクター15例、12.9%、稲コンバイン14例12.1%、耕耘機10例、8.6%、チェーンソー・田植機それぞれ5例4.3%、軽トラ4例、3.4%であり、期せずして全国調査の傾向と多少違いはあるものの同様の傾向の抽出事例となった。

表3. 農機事例

I. 農機一般			II. 果樹関係		
NO	機種	件数	NO	機種	件数
1	草刈機	19	1	モノレール	2
2	コンバイン14, 汎用コンバイン4	18	2	S S	1
3	トラクター	15	3	柿へた取り機	1
4	耕耘機	10	4	リフト	1
5	動噴・動散	6	小計		5
6	チェーンソー	5	III. 酪農・畜産関係		
7	田植機	5	NO	機種	件数
8	軽トラ	4	1	マニユアスプレッター	2
9	トラック	3	2	ワシマンハーベスター	1
10	フォークリフト	3	3	スキッドローダー	1
11	乾燥機	3	4	タイヤショベル	1
12	管理機	2	5	トレーラー	1
13	運搬車	2	小計		5
14	ワラカッター	2	IV. 大規模畑作関係		
15	電動ノコギリ	2	NO	機種	件数
16	米選別機	1	1	タマネギハーベスター	2
17	ライムソー	1	2	ポテトプランター	1
18	除雪機	1	小計		3
小計		102			

* 全国調査の農機別事故件数割合と今回事例抽出した事例割合

＜全国調査の事例割合＞		→	今回の事例割合	
草刈機	…… 18.3%	→	16.4%	
トラクター	…… 15.4%	→	12.9%	
軽トラ	…… 9.4%	→	3.4%	
コンバイン	…… 5.7%	→	12.1%	
耕耘機	…… 5.1%	→	8.6%	
チェーンソー	…… 5.1%	→	4.3%	

農機外事例は37例で、全国調査と同様、脚立、はしごの事故が上位を占めた。

後にも述べるが、今回、初めてこれらの事故の詳細が明らかになり、改めて農作業現場での脚立・はしごの安全使用に関する科学的な研究が必要と思われた。

なお、その他圃場やそれに取り付いている傾斜面、道路などでの歩行や納屋などの施設内の移動、作業での事故も取り上げられた。

今、街中では「高齢者や障害者に優しいまち作り」が盛んに叫ばれ、さまざまな施策が福祉対策として講じられている。しかしながら、今日最も高齢者が多く働く農作業現場で、「高齢者に優しい農作業現場づくり」の考え方が一向に出てこない。福祉関係者の目をぜひこのような現場にも向けてもらいたいものである。

生き物では、牛が多かった。とくに、北海道、岩手などの畜産が盛んな地域での報告である。牛の場合、人間と環境と牛の性格のコンビネーションが上手くいかないと、常に牛からの攻撃、あるいは思いもよらない行動から、体重500kg以上もある牛に襲われることとなる。

このように、今回は各地域で任意の事故抽出ではあったが、平成12年の農村医学会が行なった全国調査の事故事例割合に沿うような事故が抽出され、ケーススタディ、対面調査が実施できた。

なお、死亡例も何例か含まれたが、実際の調査では何故、事故に至ったか、何故そのような判断をし、操作をしたか、あるいは行動を取ったか本人が亡くなっているだけに、遺族や関係者が近くにいても不明なことが多かった。もし、死亡事故発生直後の現場に遭遇することがあれば、もう少し詳細な情報がえられ、原因究明も出来る可能性もある。その場合は、事故現場検証に当たる警察、あるいは救命に当たる消防署などとの関係が不可欠であり、今後の課題である。

表 4. 農機外事例

1. 用具・手具関係

NO	機種	件数
1	三脚・脚立	11
2	はしご	5
3	カケヤ	1
小計		17

2. 特に無し

NO	作業行動	件数
1	(歩行)	3
3	(火傷)	2
2	(運搬)	1
4	(階段)	1
5	(草むしり)	1
6	(退避)	1
7	(手作業)	1
小計		10

3. 生き物

NO	種類	件数
1	牛	10